

小鳥たちがいなくなり、子供たちの元気な声と足音が、代わりにやってきました。私のハウスを取り巻く風景はこの2-3年の間に一変しました。かつては、イチゴハウスの西側は田んぼと畑のみ、その向こうには広々とした山の稜線がグルリと広がっていたものです。今は二階建ての新しい家が、城壁のごとくハウスの西側を囲んでいるので、山は全く見えません。田んぼと畑がなくなったことで、小鳥たちが姿を見せなくなりました。彼らの餌がなくなったのですから当然のことです。私のハウスの側に、この1-2年で建った新築住宅は30軒位。そして新しい住人は皆30代位の若い夫婦、そして大抵は子供が二人いて、二台の車が置いてあります。人口減少と高齢化という、日本社会の現実とは違った世界が、ここでは創られつつあるようです。

春がきて…

まわりの風景が大きく変貌したのみではなく、去年の4月に息子一家が神戸から移り住んできたことで、空気が一変しましたね。近所の子供たちがやってきて、ハウスの周りを走り廻っています。新学期が始まり、朝の7時半になると、ハウスの前の道路に子供たちが集まってきます。黄色いランドセルの一年生を、上級生が引率して一緒に登校ー和やかないい風景ですな。私は思わずデジカメのシャッターを押しました。 ～ピッカピカの 黄色いランドセルは 一年生～



実を言うと、最初は心配していたんですよ。近所の子供たちの仲間に、孫たちが入れてもらえないんじゃないとか、関西弁があるのでイジメに会うんじゃないか。そんなことでしたが、これは「杞憂」でしたね。近所の子供たちが、毎日のように遊びにくるのです。そして「オジャマしまーす」、声を挙げて息子の家の中に入っていきます。新しい環境に対して、子供たちは大人よりもはるかに順応性が高いのですね。そして、丁度その頃、去年の4月に私の家にやってきたのが、前回のコラム「ニャンの悩み」で書いたネコなのです。コラムの中で書いているように、「なんとなく飼う」ことになったので、一年生になった孫娘をエサ係にしました。最初はウマくいっていると思いましたが、ある日、私は「想定外の光景」を見てしまったのですよ。

いつもは車庫にしている土間にネコのゲージを置いていました。子供たちがゲージを取り囲んでいます。そこに居たのはウチの孫娘と男の子が4人。＜この子の友達は何の子ばかりじゃなあ＞と思いつつ、なにげなく見ていると、孫娘の声がします。「この中で、ネコにエサをやりたい人！」「ハーイ！」「ボクも！」男の子みんな手を上げています。「そいじゃあ、ジャンケンして！」……＜オイオイ、ネコの餌やりで、男の子の支配かよ＞これはちょっと驚きましたね。それにしても、この性格は誰かに似ているような気がします。私は目の前のカミサンに目がいききました。「アレって、ちょっとマズクないか？」「今から＜女王様＞になってるよね」「あの子の仕切癖、なんかお前に似とらんか」「ワタシはそんなことしなかったわよ」「イヤイヤ、しっかりとDNAを受け継いどるよ。顔だって、小さい頃のおまえの写真に似とるしな」隔世遺伝というヤツですかね。それから、私は自分でネコの飼育係をすることにしました。

夏になり…

それから3か月、夏休みに入るとまもなくラジオ体操が始まります。定年になってから、「一人ラジオ体操」を続けている私にとって、子供たちと一緒にやるのは楽しみの一つです。ただ現在の「夏休みラジオ体操」は、私たちの頃とは変わりましたね。期間は夏休みの初めの2週間程度で、盆前で終わりです。そして、開始時間が7時からで、ラジカセの録音でやるのですよ。夏の朝の7時というのは、真夏には暑い時間です。どうして6時半のラジオの生放送に合わせてやらないんでしょう。近所の迷惑とか、当番の父兄の都合とか、いろいろあるんでしょうかね。



そうは言っても、二人の孫を連れて、子供たちに交じって体操をするのは、気分が変わっていいいもんです。新しい住民が増えていますから、当然子供たちも多いですね。以前は20人位でしたが、倍くらいの人数になったようです。最初、孫たちは二人ともどうしていいかわからず、前の方で棒立ち状態。ちょっと心配しましたが、そのうちにマネをしてなんとか体操らしきものになってきましたな。ラジオ体操をしている期間中に、嫁の実家のある神戸の方へ帰省したので、

「向こうの子供会に入れてもらって、ガンバって続けてな」と子供たちに言うておきました。しかし、あとで聞いたら、あちらでは「夏休みラジオ体操」がないんだそうですよ。いつのまにか、日本の学校も社会も変わってきたのですね。いずれ、この「国民的行事」もなくなって、ラジオ体操を知らない日本人ばかりになってしまうのでしょうか。少々寂しい気持ちになりますね。

夏休み中は、ハウスの周りは子供たちの「遊園地」状態。車庫にしている作業場で、草刈り機の整備をしている私の後ろで子供達は大勢でゲームに夢中。少しウルサイですが、ガマンしてやりましょう。この辺には公園もないですし、子供たちの遊ぶ場所がないのですから。ただ私は「あること」を心配していました。



以前に書いた「コラム53:2016 夏 生き物語」に詳述していますが、私のウチの庭には、夏場だけ水のある古池があり、そこにイモリがいます。深さは20～30cm程度ですから、それほど危険ではないのですが、子供だけで遊ぶのは心配ですし、なにより私は「準絶滅危惧種」を守ってやりたいのです。カワイイですからね。しかし、その心配はスグに「現実」になりました。ウチの古池の方から子供たちの声がしてきたのです。急いで行ってみると、二人の孫を含め5人の子供たちが池の周りに集まって、虫捕り網で池の中を探って、歓声を上げているのです。

「ケントクン、採るの上手！」孫の声がします。子供たちの足元を見ると、小さな虫かごの中には沢山のイモリが…私は思わず声を荒らげました。「オイオイ！もう止めとけ！みな死んでしまうぞ！」その時、後ろから孫娘が出てきました。「ジイジ！出て行け！」眉を吊り上げ、真っ直ぐに私を見据えています。その横にいる4歳の孫が、加勢するかのように言いました。「ジイジ、怖くないよ！」…一瞬、カッとなって怒鳴りつけそうになりましたよ。＜ガキのくせに！＞しかし、＜相手は子供、本気で怒ってどうする＞そう思って自制しました。



その時、私の心に「ある風景」が蘇ったのです。

この池の側で、一人イモリを採っている「少年の日」の私の姿です。

<子供がイモリに興味をもつのは、あたりまえのことじゃないか>

そう思い直しましたね。同時に、自分がやったことを後悔したのです。大人の私が、「子供の世界」に踏みこんでしまったことにです。孫娘の立場にしてみれば、自分が許可を与えて連れてきたのですから、メンツをつぶされたことになったのでしょう。

ともかく、ここはなんとか治めなくてははいけません。私は以前に熱帯魚を飼っていた容器を出してやりました。「そのままじゃあ、死んでしまうぞ。大きい水槽に入れて、ちゃんと飼ってみろ」小さい時に生き物に接するのはいいことですからね。イモリにはカワイソウですが、少しの間だけ子供たちの「勉強の材料」になってもらうことにしました。子供たちも、意外に素直に従ってくれたのです。そして、その後は？……悲惨な結末になったのです。

翌日のお昼前、私が水槽を覗いてみると、イモリたちはみんな赤い腹を上に向けて瀕死状態。すぐに池の中に戻してやりましたが、赤い腹をみせたままで、回復しませんでしたね。どうしてこんなことになったのか？すぐにネットで調べてわかりました。原因は「水温」だったのです。イモリは30度以上になると生きてゆけないらしいのですね。その頃は連日気温が35度以上の猛暑の季節でした。浅い水槽の中の水は、真夏の朝日に当たって「お風呂の湯」となり、イモリたちは全滅、というわけです。殺す気はなかったのですが、カワイソウなことをしていまいしました。

結局、孫は父親(息子)に怒られて大泣き。私は二人を畑の角に連れて行って穴を掘り、そこに死んだ10数匹のイモリをいれて、いっしょに合掌一という結末です。生物の絶滅の大抵の原因は、環境の悪化とヒトの乱獲。こうして私たちの周りの生き物は次々に消えてゆくのでしょう。今年は、イモリたちは姿をみせてくれますかね……。

秋になりました…

そこは、まるで現代のコロシウム。

広島市郊外の小さな町、国道2号線から少し入ったところにある、ほんの200坪くらいの小さな運動場が「舞台」です。今日は4歳の孫の通う幼稚園の運動会、「子供の走るのを見て何が面白いんじゃないか」などと思いつつ、カミサンに従って半ば仕方なく行きました。どうせミナで走って遊戯して、という程度と考えていたんですよ。ところが行って見ると、これが全然違っていたんですよ。



小さな運動場の周りには、応援の父兄がギッシリ満席状態で、校舎の二階三階にも人があふれています。遅く行ったので、座る余地などなく、私は滑り台の上からの観戦です。競技をしているのは、年長組(6歳児)サンの、4組に分かれてのリレー競争。子供にしてはみんな走り方がサマになっていますな。懸命の力走で、なかなかの迫力です。私は思わず引き込まれました。「この子たちスゴイじゃないか！」父兄の声援もスゴイですよ。歓声の波が、「小さな競技場」をおおっています。隣にいる若いオトウサンの叫び声。「走れエー！走れエー！コウタロー！」<はて(?)どこかで聞いたような(!)>彼は確かにそう叫んでいました。そして、運動会の最後の締めは全員での整理体操。一人の少年が前の壇上に上がって、キビキビとした動きで模範演技を始めます。

「オッ！なかなかやるのう！」手足がピシッと伸びて、実にキレイな動きです(!)

<この子は一体何者や！>自分がこの年齢の頃を思うと、<とてもじゃないか、あんなマネはできない>、と思ったんですね。

帰路、私は心のどこかに熱いモノを感じていました。子供たちの「演技」に感動したのですよ。この世に生まれて、生き始めたばかりの子供たちが、あんなにも懸命に走り、体を動かしていることに驚いたのです。これからの時代を生きて行こうとしている「あの子たち」が、少しでも生きやすい環境を造ってやるのが、この世に長く生きてきた「年寄り」の、役割だと思うんですね。少なくとも、「愚かなリーダー」により、子供たちの将来を奪われるようなことはあってはなりません。現在は、米朝は妙な「友好ムード」になっていますが('18・5・7現在)、去年の秋ごろには、お互いの国を殲滅させると言い合っていたのですから、トンデモナイことですよ。

私が「子供」であった頃…

私は、今でもそうですが、運動が苦手な少年でした。絵や習字は得意で、校内コンクールでは大抵は入賞していたんですがね。体育になると全くダメで、走ると6人中の5位か6位が定位置。ですから、運動会は憂鬱で、マーチなどの勇ましい音楽が流れてくると、逆に怖さを感じましたね。当時は、3位までに入ると胸にリボンをつけてくれるんですよ。1位が赤、2位が青、3位が黄だったんですかね。足の早い子は、誇らしげに胸に一杯リボンを付けているんですよ。それが羨ましくて、かつ何にも付けていない自分が情けなかったですね。

運動会と言えば、私の中で、いまだに蘇ってくる「情景」があります。それは小学校の2年か3年の頃であったと思います。「障害物競争」というのがあったのですよ。「徒競走」というのは、脚の早い子でないと絶対に勝てないのですが、こちらは台の上を越えたり、物をくぐったりしてゴールを目指すわけですから、足の速さだけでは勝てないんですね。その競技に出て、最終コーナーにさしかかった時のことです。5m位の幅の網をくぐって立ち上がり、すぐ近くのゴールを目指して走ろうとして、私は足を止めて、立ち止ってしまったのです。なぜって？誰も私の前にいないのですよ。いつも人の後ろを走ってたので、「風景」が全くチガッタのです。それで、不安がよぎったのですね。<ボクは何かミスをしたのだろうか！>その時、誰かが叫びました。「何しとる！早よう走れ！」私はあわててゴールに向かって走り出しました。要するに、なぜか断トツの一位だったのですね。それが小学校6年間で私が取った、たった一度だけの「赤いリボン」となったのです。



これはそれほど昔のことではありません。ほんの60年余り前の事です。あの頃は、子供たちの世界を仕切る「ガキ大将」というのがいて、集団で遊んでいましたね。しかし、私は外で他の子供たちと遊ぶより、家で本を読んだり、一人で遊ぶことを好む少年でした。当時は兄弟のいない「一人っ子」であったこともあり、良く言えば、内気でおとなしい「いい子」、悪く言えば臆病で気の弱い子であったと思います。「オバアチャンっ子」というんでしょうか。本当の祖母ではなく、父の叔母に当たる人だったのですが、彼女に溺愛されて

幼児時代をすごしたのです。私がスポーツが苦手な少年になったのは、それが原因ではないかと思いますね。それでも中学で、思い切って体育系のクラブに入ってみればよかったのですが、その勇気もなかったのですね。私の人生の中で一番の後悔となっています。

そして再び春がやって来て…

今年のイチゴ栽培は、いろいろと大変でしたね。一番の誤算は3月から出荷先が変わったこと。今まで洋菓子店直販でやってきたのですが、事情あって、JA産直市を販売の主流に切り替えることになったのです。出荷形態を、通いのプラケースから、全部を何種かのパック容器に入れ、価格

を自分で付けるのですから、全く出荷作業が変わったのですよ。これは慣れるまで最初は大変でした。しかも、その頃が今年の出荷量のピークであったのです。

イチゴ栽培には、半年位の出荷期間の中で何度かの「山と谷」があります。12月から1月にかけての最初の実を付けるのを「第一果房」と呼んでいます。2回目が2月から3月、そして3回目が3月から4月、最後の4回目の果実が5月以降となりますね。要するに、平均して実がなり、出荷をするわけではなくて、何度かの出荷の波があるということなのです。今年はクリスマス前に今までにない位の大量出荷が出来て、順調にいくと思われたのですが、1月から2月は去年の半分という情けない状態。2月の半ばからは、なぜか巨大イチゴばかりとなり、イチゴが好きなウチのベリーちゃんもビックリというほどに。しかし、それは売上としては、ほんの少し巻き返した程度でしたな。そして、3月に入ると、恐ろしいほどの増量となり、毎日出荷しても、全部をパック詰め作業することができないほどの状況になったんですよ。



せっかく熟れたのに、出すことが出来なかったイチゴを、＜ジャムにするのもモッタナイよのう＞と思っていると、ハウスの外から子供達の話声。大きめのパック容器に山盛りにして持って行ってやりました。そこにいたのはウチの孫二人と近所の二人の女の子。一人が「ワタシ、イチゴ食べないの」、あんまり喜ぶ風でもないんですな。ちょっとガッカリです。「残ったら、夕食の時でも食べればいいよな」そう言って、バケツの上にイチゴを置いて、その場を離れました。

少しあって、ハウスの中で作業をしていると、大勢の子供たちがバタバタと走る音。「イチゴがあるで！」という声が聞こえます。外に出てみると、男の子ばかり6人が奪い合うようにして、うれしそうにイチゴをほぼっています。私は思わずデジカメのシャッターを押しましたよ。なんやウレシカッタのですね。「オジチャン、またイチゴちょうだい！」「また今度な！」翌日、その時の男の子の一人がお礼を言ってくれましたね。「ここのイチゴ、チョーオイシイ！」子供は御世辞を言いませんね。最高の「ほめ言葉」です！



先日、孫娘の通う小学校の新聞が配布されてきました。その中に、「わたしの夢」という欄があり、今年卒業した6年生が将来なりたい職業を書いているんですね。野球選手、医師などの「あこがれの職業」を書いている子と、先生、看護師、保育士といった「堅実型」の子に分かれるのは、昔からあまり変わっていない感じです。少し驚いたのは「ユーチューバー」などという職業を書いている子が何人かいたことですね。よくわかりませんが、「ユーチューブ」に投稿して、収入を得る仕事なんですかね。「こんなんでも生活出来るんかい」と、ツイ考えますが、それも「時代おくれ」ということになるんでしょうな。女の子の中に、「介護士」と書いている子が何人かいましたが、これも私たちの時代には挙げられることはなかった仕事ですね。子供たちは意外と敏感に、これからの社会を感じ取っているのでしょう。

「2045年問題」というのがあります。AI(人工知能)が、人間の脳を超えるとされる年だそうです。その頃には、生産や販売、建設などの現在ある職業のかかなりの部分が大幅に減少し、AI 関連の専門技術者が大幅に増加するとされているようです。要するに、AI を使う人間と、AI に使われる人間に二分されるということでしょうね。あと27年後ということになりますが、それほど遠い未来というわけではありません。ほんの27年前の1991年には、現在のスマホ社会どころか、携帯もほとんど普及していなかったんですからね。



いずれにせよ、今の子供たちは、否応もなく、この流れに組み込まれてゆくことになると思いますね。彼らは、現時点では予想もつかないような仕事をするようになるかもしれません。その頃まで、私がシブトク生き残っていれば95歳。可能性としては少しはあるかもしれないですが、人類がAI を制御できない世界になるとも言われていますからね。そんな時代を「見たい」ような、「見たくない」ような……。もしかして、「AI ロボットの兵士に人間が攻撃されて、人類は滅亡の危機」といった、映画で描かれた世界が現実になっているかもしれないですからね。

95歳は無理にしても、せめて米寿(88歳)位までは…などと考えるんですが、これもその年齢になると、「もう少し生きていたい」と欲が出てくるものなのでしょう。私も今年は満69歳、数え年という70歳ですから「古希」ということになります。「古代稀なり」という言葉からきたようですから、昔ならこんなに長生きする人は非常に少なかったということでしょうか。ハッと気づいてみると、私は「オッサン」どころか、今や「ジジイ」の仲間に入っているのです。しかし、イチゴ栽培という農業をしていると、なぜか自分が「老人」になっていることを忘れていんですね。いつも、「これから何をするか」ということを考えているからでしょうか。

「子供であった頃」から60年の歳月が流れ、「万物は生生流転」、時の流れとともに、昔の風景が失われ、私を取り巻く世界も、すっかり変わってしまいました。その間には、多くの人と出会い、いろんな所に行き、沢山の経験と思い出をつくりました。しかし、今振り返って見ると、自分自身はそれほど変わっていないように思えるのです。あの頃の私は、一人だけで庭の片隅でイモリと遊んでいましたよ。今の私、イチゴハウスの中で、側にネコをおいて仕事をしています。ホラッ、ちっとも変わっていないじゃないですか。「三つ子の魂、百まで」一少年の頃と変わらぬ自分がそこにいるのです。オッ！時々ハウスの中に入って来る「配偶者」、カミサンの存在を忘れてはいけませんな。

前記の「卒業新聞」を見て、もう一つ気づいたことがあります。女の子の名前の下に、「子」が付いている子が見事にいないのです。男の子の名前にも、「男」とか「夫」という字が使っていないですね。いつのまにか、日本人の名前は、こんなにも変わっていたのです。このことは日本人の価値観や、社会の変化ということと無関係ではないでしょうね。



「二世代もまたぐと、子供も変わるのがあたりまえよ。今の子供はワシらには＜異星人＞かもしれんのう」